

研究結果報告書

日朝関係の改善におけるモンゴルの役割

所属 モンゴル国立大学人文学部

役職 講師

氏名 NORJIN BADRAL

日朝関係には未だに不透明な部分が多く、日本国民に対して明らかにされていない事項が多い。そこで、本研究では、モンゴル・北朝鮮・日本の実務家・研究者へのインタビュー、史料調査を綿密に行うことによって日朝関係の未解明の諸問題を明らかにし、正確な情報をモンゴル・北朝鮮・日本の国民に提供することにより、日朝関係の改善、ひいては北東アジアの平和の実現に貢献することをめざした。

本研究により以下の事実が明らかになった。第一に、モンゴルと北朝鮮が常に緊密な友好関係にあったわけではないという事実である。モンゴルは1948年10月にソ連に次いで2番目に北朝鮮と国交を樹立し、モンゴル・北朝鮮相互援助条約（1953年）に従い、1万頭の馬を北朝鮮に寄贈するとともに、1960年代には400人以上の北朝鮮戦争孤児をモンゴルで養育するなど緊密な関係を築いた。しかし、中ソ関係が悪化すると北朝鮮は中国寄りの姿勢を取り、親ソ連のモンゴルとの関係は緊張した。1980年代半ばにソ連と中国の関係が改善されると再びモンゴルと北朝鮮の関係は改善し、モンゴルと北朝鮮は友好協力条約（1986年）を締結して、1988年には金日成主席がモンゴルを訪問した。

第二に、モンゴルが社会主義を放棄したにも関わらず、むしろ北朝鮮はモンゴルとの文化協力を強化しようとして努力してきた事実である。1990年のモンゴルの民主化以後、モンゴルと北朝鮮の関係は一時的に疎遠になったが、北朝鮮は市場経済化を進めるモンゴルに関心を持ち、北朝鮮の教育大臣をモンゴルに派遣してモンゴル国立大学と金日成総合大学は交流協定を締結し、金日成総合大学にモンゴル語学科を開設したほか、モンゴルで開催された「アジア現代美術展」（2016年8月）に北朝鮮が代表団を派遣するなど、文化面での交流を強化してきたのである。

第三に、北朝鮮はモンゴルの主催する国際会議には代表団を派遣し、またモンゴル政府が日本政府の意見を代弁する際には北朝鮮は耳を傾けるという事実である。モンゴル戦略研究所が2013年以降開催している国際会議「ウランバートル対話」に北朝鮮は代表団をたびたび派遣しており、2014年8月にモンゴルで開催された「北東アジア市長フォーラム」にも北朝鮮は代表団を派遣している。また、モンゴル政府は日本政府の拉致問題に関する立場に繰り返し支持を表明しているにも関わらず、2013年に北朝鮮はモンゴルのエルベクドルジ大統領の訪問を受け入れている。

これらの事実からは、北朝鮮はモンゴルに特殊な役割を期待しているのではないかと推測されるのである。モンゴルが北朝鮮との関係で担う役割はまだ明確ではないが、今後、日本にとってモンゴルの存在は重要な意味を持つてくるだろう。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

- ① ラウンドテーブル「北東アジア諸国の関係におけるロシア連邦とモンゴルの役割」（2016年8月、モスクワ・ロシア語学院大学にて）
- ② ラウンドテーブル「日朝関係におけるモンゴルの役割」（2017年6月5日、モンゴル・ウランバートル市ハーンジムス会議場にて）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

- ① ノルジン・バドラル「北東アジア地域のモンゴル - 日本関係」（『外国語教育の方法論』第44号、2016年、44～47頁、ウランバートル市、モンゴル語）
- ② ノルジン・バドラル「東北アジア地域ネットワークから見たモンゴル人と日本人の関係」（『外国語教育の方法論』第45号、2016年、27～31頁、ウランバートル市、モンゴル語）
- ③ ノルジン・バドラル「東北アジア地域のパートナーシップのためのウランバートル対話について」（『外国語教育の方法論』第46号、2016年、35～38頁、ウランバートル市、モンゴル語）
- ④ ノルジン・バドラル「民族間におけるコミュニティーコミュニケーションの発展」（『外国語教育の方法論』第47号、2016年、36～39頁、ウランバートル市、モンゴル語）
- ⑤ ノルジン・バドラル「モンゴルと日本の包括的な戦略的提携」（『外国語教育の方法論』第48号、2017年、41～43頁、ウランバートル市、モンゴル語）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

- ① ノルジン・バドラル『モンゴル・日本および北朝鮮の関係』（ADMON Print、2016年、単著、208頁、ウランバートル市、モンゴル語）